

マラテスタ研究をめぐる史料状況 素描  
(1871-1891)

戸 田 三三冬

**The Formation of the Anarchist Ideas of Young Errico Malatesta**  
— A Rough Sketch on the Material Situation —

**Misato TODA**

**Abstract**

This paper attempts to give some information on the study of anarchist ideas of Errico Malatesta in his early days. Malatesta entered in the Italian republican movement when he was a middle high school boy. When he studied medical science at the university of Naples, in 1871, under the influence of Paris Comune, participated the socialist activities in the Neapolitan section of the First International. Being one of the most active members, he taught workers' children in the evening school of the International, and became one of the editors of its organ, 《La Campana》 (bell). His necrology for Giuseppe Mazzini, the former Maestro, shows how deeply he was influenced by the sincerity of his old teacher. Even though he has changed his ideology, still remains Mazzini's teachings of love and duty in his heart. After the fall of Paris Comune, the International Working Men's Association was divided into two camps, Marxist and Bakunist. The latter formed so-called Anti-Authoritarian International at St. Imier, a small town in Giura, Switzerland. There Malatesta participated, and in this occasion, met Michel Bakunin for the first time. Bakunin called Malatesta with given name "Benjamin". Malatesta will be faithful to Bakunin's soul all through his life, although he modified some of the ideas of the teacher. The paper covers roughly up until 1891, the year of the publication of his pamphlet, *Anarchy*, in London. The work, which he began to write in 1884 on his paper 《La Question Sociale》 (social problem) at Florence, was continued to write on his paper with the same name, in the days of his exile in Argentina. The focus is not on the analysis of the contents of *Anarchy*, but on the understandings of the material situation on his activities which have guided him to write and condensed his own theory, on Anarchy and Anarchism.

**はじめに**

2002年3月末、私はいつか訪れたいと思っていた、ブリュッセルの「王立総合文書館」(Archives

Generales du Royaume) に足を踏み入れた。ここには、1880-81年当時のエッリーコ・マラテスタ (Errico Malatesta 1853-1932) 関係文書が存在する。

文書の所在を知ったのは、ジャンピエトロ・ベルティの『フランチェスコ・サヴェーリオ・メルリーノ 社会主義アナキズムから自由社会主義へ (1856-1930)』<sup>1</sup>における一つの注記からであった<sup>2</sup>。それによると、1881年7月にロンドンで開催された「国際社会革命家大会」準備のために、マラテスタがベルギーの同志ととったコンタクトについての史料ファイルが、ここにあるという。ベルティはメルリーノを追ううちに、この史料に巡り会ったのであろう。文書番号は：Police des Etrangers, Dossiers individuels, n.353.081 (Malatesta Errico)。前もってメールで連絡をとり、開館時間などを問い合わせると、私の到着に合わせて、文書ファイルを出しておいてくれるようになった。

対面した文書は、1ファイルだったが、厚さ20センチほどの箱状のもので、なかに書類の束が入っていた。フランス語の手書き文書である。文書整理の仕方は文書館によって異なり、ナポリ国立文書館のような大文書館は、かつてのイタリア王国知事文書や警察文書が、当時束ねられた束そのままに、どさり、と出て来たりするが、ここはより小規模のポローニャの国立文書館のように、文書館司書 (アルキヴィスタ、archivista) の整理の手がかなり入っているようだった<sup>3</sup>。

文書閲覧の部屋もさまで広くなく、向かい合って3人がけ位で座れる大きな木の机が6台くらいあったろうか。右手奥にはデータを検索したり、主要雑誌を閲覧出来る史料室があり、そこにはカード式のコピー機があって、文書を自由に自分でコピーできることが嬉しかった。

マラテスタは、私がここ30年来関心をもち続けて来たナポリ生まれのアナキストである<sup>4</sup>。19世紀から20世紀にかけて生き、強権としての国家と対立する社会、社会を構成する個人と集団、その自由と自治と連帯を求め、権力なき社会の建設を目指して闘いつつ、あくまでも「愛」を大切に「革命家」である。しかし、電気機械技術者として生活を立てていたから、今日流に言えば「市民運動家」の側面ももつ、と言ってもいいかもしれない。もしここに彼が現れたら、皆が好きになるだろうような、親しみ深いひとであるにちがいない。といっても、彼は私が生まれる前にこの世を去ってしまったのだから、いくら会いたくても会える人ではない。1853年の生まれで、亡くなったのは1932年。イタリア近代国家 (国家統一) が成ったのは1861年、日本近代国家成立の明治維新より7年早い。マラテスタの一生は、19世紀イタリアの国家統一の8年前から、20世紀のファシズム期までの約80年間を覆っている。日本流に考えると、幕末期、明治維新の15年前から昭和7年までにあたる。

昨年 (2003年) 12月、彼の生誕150周年を期して、ナポリで記念学術大会が催され、招待されて、私も小さい報告をした。「官製ではない歴史」に向き合おうとするすべての人びとに開放されており、歴史のなかのマラテスタや彼の思想の現代性など、国外やイタリア全土から集まった多彩な専門家の報告が3日も続き、最後はナポリ湾を見下ろす岡の上 (ここに辿り着くのも、ここから降りるのも大変だった) の小屋で自前の大宴会となった。ナポリ語の19世紀アナキストの歌や踊りなどに皆が参加し、高校生から一般市民まで、土地のワインの大盤振る舞い (全部カンパや寄付でまかなった) を楽

<sup>1</sup> Giampiero Berti, *Francesco Saverio Merlino. Dall'anarchismo socialista al socialismo liberale (1856-1930)*, Milano, FrancoAngeli, 1993.

<sup>2</sup> *Ibidem*, p.50.

<sup>3</sup> ナポリとポローニャの国立文書館については、戸田三三冬「ナポリ文書館生活素描」『イタリア學會誌』XXXVI号 (1986年10月) 参照。

<sup>4</sup> なぜ私がマラテスタに関心をもったかについては、戸田三三冬「南欧からの手紙-エッリーコ・マラテスタをめぐることども」『史艸』第17号 (1976年11月) および Misato Toda, *Why the ideas of Anarchism is Necessary for Japanese Society : A Letter from Japan*, in: 《Peace Studies Newsletter》, No.10 July, 1991を参照。

しんだ。3日間の内には、マラテスタの生地で近郊の町、サンタ・マリア・カプア・ヴェーテレの劇団による、マラテスタの生涯の寸劇もあった。音楽入りで、なかなか楽しかった。主演の美女、アンナ・レーディとも親しくなり、今度サンタ・マリアの町で何かやろう、となかば本気で約束した。

12月4日（まさに彼の誕生日）の土地の新聞《イル・マツィーノ》（イタリアには全国紙はなく、それぞれの都市に新聞がある。《ラ・スタムパ》はトリノーの、《コリエーレ・デッラ・セーラ》はミラノの新聞、もちろん大きい新聞は全国的にキオスクなどで販売されている）に、この大会が紹介されている。スコットランドヤードの前で撮られたマラテスタの有名な写真の下に大活字で「マラテスタ、反グローバルの予言者」と書いてあり、「平和、エコロジー、人間等身大の一つの社会というテーマについて、今日的に彼の遺産を結集する」と見出しがある。皆に教えられて見ると、私のことも書いてある。「報告者のなかには、東京からやってくる70歳の日本の歴史家、Misato Toda もいる。社会主義運動の諸著書の中にはマラテスタについての一冊がある。」（これは私のイタリア語の『エリコ・マラテスタ マツィーニからバクーニンまで』<sup>5</sup>のことであろう。）

私の行なったレポートは、イタリア語としてはにわかごしらえだったが、「平和の方法としてのアナキズム」。社会と個人の自治の根源として、ここずっと考えて来た、平和学の「エムパワメント」と「アソシエーション」に基づく「地球市民」論と、歴史的アナキズム思想（ブルードン、バクーニン、マラテスタ）との関係性について、少しコメントを述べ、マラテスタの、アナキズムの究極の目標は「愛」だということと、日本の草わげのアナキスト・布留川信<sup>6</sup>さんの「自由・平等・友愛・正義」はみな一つのもので切り離せない、という考えの、質的共通性を指摘した。ほんのヒント位の話しかできなかったが、聴衆は、心がこもっていた、感動的だった、と何度も拍手してくれた。テープもないので、今は再現できない。マラテスタは喜んでくれたかなあとと思っている。私の本を手にサインを願う若者が二人きた。カナダから来てすぐ発たねばならないという青年が、質問がいっぱいあるから、帰ってからメールを送る、と言う。本当に先日それがやってきたが、何項目もあって簡単に答えられる代物ではない。しかし、生誕150年で、マラテスタもようやく歴史上の人物になり、思想史の対象になってきたかとの感がある。

## (1)

新聞にも予告されていたが、多分この生誕祭を期して、2冊の本が出版された。一つは『一度も書かれなかった自伝』、マラテスタが自分の周辺について、必要に応じて書いたものを、時代順に並べたアンソロジーで、ピエロ・ブルネッロとピエトロ・ディ・パオラの編集である<sup>7</sup>。どこかで見たものも多く、私の本も照会されているが、知らなかったものも幾つかある。あちこちに散在してなかなか見るのに容易でないものを、内在的な関連性をつけながら出典を明記して、編集・出版した功績は大きい。マラテスタ生地の町の出版社スパルタコから刊行されているのも、土地のひとの愛情が感じられる。スパルタコとは古代の奴隷反乱の指導者のスパルタクスのことで、いまも圧政に対する人

<sup>5</sup> Misato Toda, *Errico Malatesta da Mazzini a Bakunin. La sua formazione giovanile nell'ambiente napoletano (1868-1873)*, con presentazione di Alfonso Scirocco, Napoli, Guida, 1988.

<sup>6</sup> 布留川信さんについては、日本アナキズム運動人名事典編集委員会編『日本アナキズム人名事典』（ばる出版、2004年）の項目「布留川信」（執筆、戸田）を参照。なお戸田三三冬「平和の方法としてのアナキズム」太田一男編『国家を超え視角—次世代の平和』（法律文化社、1997）でも言及。

<sup>7</sup> Errico Malatesta, *Autobiografia mai scritta. Ricordi (1853-1932)*, a cura di Pietro Brunello e Pietro Di Paola, Santa Maria Capua Vetere, Edizioni Spartaco, novembre 2003.

民の反乱の象徴となっているが、サンタ・マリアはその発生の地である。ちなみに、20世紀における有名な命名は、1918年のドイツ革命で活躍したローザ・ルクセンブルグの率いたスパルタクス団（ドイツ社会民主党左派の反戦派）であろう。私の発表の後で、この出版社の出版物を並べて売っていた、やさしい面ざしの娘さんが、「私はカソリックだけれど、あなたの愛の話が身に沁みただから」と言って、私がもうこの本を買っていたので、別の一冊をプレゼントしてくれた。

このアンソロジーには、ブルネッロが、「マラテスタは決して自分自身について語らなかった」という見出しで序文を書いており、デイ・パオラが、「ロンドン時代の肖像」と題して、亡命中のマラテスタについて興味深いスケッチを描いている<sup>8</sup>。現在ロンドンで勉強中とのことであるが、文書史料は主に、ローマ中央文書館およびイタリア外務省外交史料文書館所蔵のものを使っている。

マラテスタには終生スパイあるいは「尾行」警官がつき、一挙手一投足が報告されていた。EURにあるローマ中央文書館には、マラテスタに関するパーソナルな厚いファイルが5冊ある。（勿論このほかにも、各地文書館の知事・警察文書の数多いファイルのなかに散在しており、外務省外交文書館にも関連文書がある。）このマラテスタ関係文書は、1970年代と80年代に調査した時は4冊だったが、97年に訪れた時は5冊に増えていた。5冊目には、彼が運動や新聞発行のためにつけていた克明な会計帳簿が、何冊も集められていた。ざっとみるとそれぞれ収支のバランスはよく取れているようで、私は改めて、彼のきちんとした有能さを見直し、「技師」としての彼のリアリズムを再発見した。なお、胸を突かれたのは、帳簿の形式が、彼がナポリのインタナショナルに加入したばかりの時、会計係として責任を負った夜学校（後述）の手作りの帳簿とそっくりなことであった。この1871年の帳簿は、押収されたお陰（？）で、今、ナポリ国立文書館のファイルの中に存在する。

二冊目は、上述のメルリーノについてのモノグラフを書いたジャンピエトロ・ベルティの分厚いマラテスタ伝である。『エッリーコ・マラテスタとイタリアおよびインタナショナルなアナキズム運動、1872年-1932年』<sup>9</sup>。現在までの伝記的な史料のほか、国内外の国公立文書館、私文書館の文書史料を使った本格的な歴史研究書である。マラテスタ60年のアナキスト革命家としての生涯は、イタリア・アナキズム運動にそのまま重なる、と言われて来たが、ベルティの研究は、これを踏まえて、タイトルにもあるように、その国際性を強調している。

ちなみに、彼が史料調査のために訪れた文書館を列挙してみると、マラテスタの生涯を通じた行動範囲の広さが推し量れる。国内では、前述のローマ中央文書館と外務省外交史料文書館はもとより、アンコーナ、ボローニャ、バーリ、カターニャ、コセンツァ、フィレンツェ、フォッジャ、フォルリ、ジェノヴァ、ミラノ、マントヴァ、マチェラータ、マッサ、ナポリ、パレルモ、パドヴァ、ピサ、ピストイア、ローマ、レッジョ・カラブリア、ロヴィーゴ、シラクサ、トリーノ、ヴェネツィアの諸国立文書館におよぶ。国外では、ベルギーのブリュッセル王立文書館、フランスのパリ文書館と警察庁文書館、スイスではベリンゾーナ国立文書館やベルンの州立文書館などのほか、アナキズム運動研究にとって不可欠なアムステルダム国際社会史研究所やローザンヌのアナキズム研究国際センターも利用している。私文書館では、ピストイアのベルネリ家文書館、ミランドラのチェレッティ文書館、ボローニャのアルド・ヴェントゥリーニ文書館などを訪れ、さらに、リーミニ、ボローニャ、ベルガモ、アンコーナ、イーモラの市立図書館、パリ国立図書館にも、ボローニャやイーモラのリソル

<sup>8</sup> ロンドン亡命中のマラテスタについては、レーヴィの先行論文がある。Carlo Levy, *Malatesta in Exile*, in: *Annali della Fondazione Luigi Einaudi*, vol.XV, Torino 1981.

<sup>9</sup> Giampietro Berti, *Errico Malatesta e il movimento anarchico italiano e internazionale. 1872-1932*, Milano, FrancoAngeli, 2003.

ジメント博物館やまた、労働会議所、イタリア組合同盟にも足を運んでいる。マラテスタの足跡を追えば、自然にこうなるだろう、という範囲であるが、これは大変な努力であったろう。ヨーロッパにおける文書史料蓄積・整理・公開の社会的約束があって初めて出来たことである。

しかし一方、マラテスタの足跡は、エジプトやルーマニア、ボスニア、また南北アメリカ大陸やキューバにも及んでおり、ブエノスアイレスの「インヘニエロス図書館 (Biblioteca José Ingenieros)」や「アルゼンティン・リベルテール連合 (FLA) 文書館」にも、貴重な史料の集積がある<sup>10</sup>ことを考えると、「国際的」の範囲はもっと拡大する (マラテスタの足跡はシベリアから脱走して中国、日本を見聞してロンドンに到着したバクーニンは異なり、アジアには及んでいない)。いずれにせよ、この科学的な歴史研究ができあがるまでには、諸国立文書館所蔵の大臣、知事、警察の報告書からなる該当文書の渉猟、私文書館所蔵の書簡や日記類、また、各種図書館や研究所所蔵の、無数の運動関係のパンフレットや新聞類などの参照の積み重ねのあったことが、巻頭の表からだけでも、窺われるに十分である。

ミラノで出ている《リヴィスタ・アナルキカ》(アナキスト雑誌)の2004年2月号が著者ベルティへのインタビュー<sup>11</sup>を載せているので、その発言の中から、本稿との関係で注目すべき二、三の点を抜き出してみよう。

まずベルティは、他の有名なアナキストたち(メルリーノやバクーニン、クロポトキン、ルクリュなど)と異なって、1872年にバクーニンを知ってから1932年までの60年の長きにわたり、アナキストであり続けたのはマラテスタだけだ、と指摘する。この、いわば「全生涯のアナキスト」と徹底的に向き合いたかったのが、執筆の動機であるという。マラテスタが「真の偉大な革命家」である、と定義するわけを聞かれて、こう答えている。「マラテスタは、最後まで徹底的な首尾一貫性をもって生きる、完全無欠 (integrale) のアナキストだ。そしてこの首尾一貫性の深い倫理的な根源を辿れば、あのマツィーニから継承したものに突きあたる。すなわち考えと行動を結びつけ、その考えに仕えるために、自分自身の生活を従わせるという生き方だ。そういう意味で、マラテスタはひとりの職業的な革命家だ。しかし異例だ。何故なら他の革命家は大部分、出版業、ジャーナリスト、知識人として生きた。しかし、マラテスタはただひとり、手仕事をして生きながら、仲間のなかで大きな力と倫理的な権威を勝ち得た。基本的な点は、偉大な思想家であるのに、行動から離れた考えを少しも持たなかったことだ。つねに現実と直面する彼の能力はここから説明できる。」

いくつかの論理的、イデオロギー的、歴史的な質問に答えて、一冊の網羅的な書物を書きあげたベルティがつねに強調し、そこへ戻ってゆく応えは、マラテスタの倫理性と道徳性である。またその実存性である。生きてゆくことから生じる諸関係に密着する、「ドラマティックな現実主義者 (un materialista ma drammatico)」であり、そこから発する「明澄性 (lucidità)」である。マラテスタにとっては、アナーキーは歴史的必然でも、科学的必然でもなかった。科学的知識は単なる手段である。究極の可能性としてのアナーキーな世が来るか来ないかは、それを創り出そうとする人間の自由意志にかかっている。人類の文明の潜在的可能性が問題なのだ。

<sup>10</sup> この調査に関しては、戸田三三冬「スペインの旅・南米の旅」(イタリア近現代史研究会リレー・エッセイ、1997年9月)、参照。

<sup>11</sup> Massimo Ortali, *Intervista a Giampietro N. Berti / Rivoluzionario tutta la vita*, in: 《rivista anarchica》, a. 34, n. 1, febbraio 2004.

## （2）

アナキズムの基本は暮らしの「自治」である。まず始めに具体的な人間集団の、風土と歴史に根ざした暮らしがあり、その暮らしをどう運営してゆくか、という方法がある。アナキズムは、この人間集団の自治の方法である。各人がもって生れた自分の可能性を十分に開花できる方向で、できるだけ自由に生き、また同時に、他の自由をどれだけ許容できるかを工夫する、集団のなかの一人ひとりの自治の方法でもある。自治とは一人ひとりが自らを治め、他との関係を自由につくるところから始まる。

これがなかなか容易でないのは、それぞれが、歴史や伝統をもつ社会のなかで、男とはこうすべきもの、女とはこうすべきもの、大人とは、子供とは、老人とは、、、というふうに、役割をいわば構造的に強いられ（構造的暴力）、それを大なり小なり内面化（構造的暴力の内面化）しているからである。またこの一種のルールを演じなければ、関係が円滑にいきにくい、という厄介な面をもつ。したがって、自治の対極にあるのは「権力支配」であり「政治」である、と言ってよいかもしれない。なぜなら「政治」とは、「権力関係を自己の利益につながる方向に変えようとする行為」（Wallerstein）であり、構造的暴力を造り出すものであるからである。アナキズムは、この「構造的暴力」から自由になり、自他ともに創造的に生きる方法である、と言いかえてもよい<sup>12</sup>。

これを、マラテスタその人に聞いてみよう。今ではアナキズムの古典となった「アナーキー」は、かなり長い論文である。亡命中のブエノスアイレスで刊行した新聞《社会問題》（La Question Sociale）の第2号（1885年10月4日）の第一面に掲載され、何回か連載の形で始まった。初めに、次ぎのような但し書きがついている。「この標題のもとにこれから刊行するノートは、昨年フィレンツェの《社会問題》紙に発表し始めたが、新聞没収と刑罰の憂き目にあい、連載を中断したものである。」

「アナーキーとは、ギリシア語からきた言葉で支配の無いこと、民が上からの権威や権力無しに、自分達を治める（自治を行う）ことである。」

この作品はのちにパンフレットになるが、この冒頭の一節は変わらない。これが基本中の基本である、ということだろう。さらにいくつかの部分抜き出してみよう。

人間は習慣の動物である。「いつも政府の圧力を当たり前と思い、自分の生活への規制や監視や徴税になれている市民は、政府の支配権力が無ければ社会生活は不可能だと信じている。」

「ここに、生まれてからこのかた足を縛られて、それでも何とか歩くことが出来る人がいるとする。そして彼は、縛られているからこそ歩けるのだ、と信じているとしたら、それを解くことに頑強に反対するであろう。解けば足がなえて歩けないと思い込んでいるからである。」

「その人に、もし一人の医者があらゆる理論や症例を提示して、足を縛っていなければ、歩くことも生きることもできないのだと説得するとしたら、彼はそれを解いてくれようとする人を敵だと思い、怒り狂って抵抗するであろう。」

「そこで、支配は必要だし、支配権力なしには秩序もなく、混乱があるばかりだと思ふことは自然で

<sup>12</sup> 戸田三三冬「アナーキーな幸せ」コリーヌ・ブレ編著『人間アナーキー』（モジカンパニー、2002年）。構造的暴力の内面化については、戸田三三冬「地球民主主義の芽」『平和学の現在』（岡本・横山編、法律文化社、1999年）、227-233頁を参照。

あったし、支配権力の無いことを意味するアナキーとは、秩序の無いことだと響いたのである。」<sup>13</sup>

マラテスタは、このノートのかなり始めのほうで、自由についての、有名なバクーニンの言葉を引いている。

「どんな人も、皆が人間らしく生きられるよう、協力しなければ、自分も人間らしく生きられない。どんな人も、周りの人たちと一緒に解放されなければ、解放されない。私の自由は、皆の自由である。何故なら、私の自由と権利は、みんな平等な人びとの自由と権利のなかで、皆から同意を得ない限り、保障されないからだ。つまり理念的な自由ではなく、実体としての自由は、[まわりの皆との関係においてでなければ] 存在しないからだ。」

このブエノスアイレスの《社会問題》紙に掲載されはじめた「アナキー」は、フィレンツェで中断したのと同じ箇所でも中断している。フィレンツェの第8号（84年5月4日）、第9号（5月11日）、第10号（5月18日）掲載内容は、それぞれ、ブエノスアイレスの第2号（85年10月4日）、第8号（11月15日）、第9号（11月22日）の掲載内容に等しい。マラテスタの南米亡命は85年から89年の夏までである。彼はヨーロッパに帰って直ちに、フランスのニースで次の新聞《アソシエーション》（L'Associazione）を刊行し（創刊号89年9月6日）、ついでロンドンに移って同紙の刊行を継続した。『アナキー』はその間にも書き進められた模様で、91年3月、《アソシエーション文庫》の第5番目の刊行図書として、初めて一冊のイタリア語パンフレットになって世に出た。すぐ英訳が《フリーダム》紙に連載され、92年に《フリーダム・パンフレット》第5号として出版された<sup>14</sup>。マラテスタは、自分の書いたものなかで、この「アナキー」が一番気に入っていたということである<sup>15</sup>。

1884年からフィレンツェの《社会問題》紙に連載のかたちで書き始めて、ブエノスアイレスでこれらをそのまま、同名の新聞に連載を再開し、新聞の中断とともに、連載も終わったのである。だが、彼が南米滞在のあいだに取り組んでいたのは、イタリア人、スペイン人を初めとする、さまざまな職種の移民労働者たちの労働運動の立ち上げだった。自分自身も上陸と同時に、同志でこの職業では先輩のフランチェスコ・ナッタ（Francesco Natta）とともに仕事場を開き、移民労働者・電気機械工の一人として働き始めた。新聞のオフィスは、港湾に近いピエタード通りであり、夜の8時から10時まで公衆に開放されていた。時には夜を徹して、熱い討論会もあった模様である<sup>16</sup>。当時のアルゼンティン、とくに首都で港湾都市のブエノスアイレスでは、イギリスを初めとする国際資本の経営する企業の過酷な労働に抵抗して、ストライキが主たる闘争手段であり、しばしば成功をおさめた。

マラテスタは、ここで、働く者に対するグローバルかつ赤裸々な搾取の実体を見たはずである。また、資本と結びついた国家権力についても、労働現場からつぶさに観察したであろう。その状況を、つまり働く者の立たされている社会的位置付けを、噛み砕いて労働者たちに説明する責任を感じたで

<sup>13</sup> Errico Malatesta, *L'Anarchia*, in: 《La Questione Sociale》 di Buenos Aires, n.2 (4 ottobre 1885), anche prima in: 《La Questione Sociale》 di Firenze, n.8 (4 maggio 1884).

<sup>14</sup> Max Nettlau, *Bibliographie de l'Anarchie*, Paris, 1897 (reprint, New York, 1968), p. 126.

<sup>15</sup> ルイジ・ファップリへの述懐（戸田三三冬「ユートピアの実験－モンテヴィデオにおける共同体－」『政経研究』第70号（1998年3月）、66頁参照）。

<sup>16</sup> Cfr. Misato Toda, *Errico Malatesta e la Diaspora anarchica in Argentina (1885-1889)*, in: *Risorgimento, Democrazia, Mezzogiorno d'Italia, Studi in onore di Alfonso Scirocco*, a cura di Renata De Lorenzo, Milano, FrancoAngeli, 2003. なおアルゼンティンのアナキズム運動については参照：Gonzalo Zaragoza, *Anarquismo argentino (1876-1902)*, Madrid, Ediciones de la Torre, 1996.

あろう。具体的な相談や集会の場で、対話的に質問に答え、やさしく説明する無数の場面があったであろう。《社会問題》紙が出なくなってからの4年間は、こうした対話が次第に積み重ねられていったアクティブな時間帯だったと想像できる。こうしたなかで、彼の「アナキー」は、少しずつ書きつがれ、熟していったものであろう。そしてロンドンに居を定めて（1919年に決定的に帰国するまで、ここが彼の最長の亡命地となる）、電気機械技師の仕事場を開き、生活を立てながら新聞を出し、集会に参加し、プロパガンダを行なう、という生活が定着し始めて1年、数年間の努力が実を結んだのであろう。すでに84年のフィレンツェで、マラテスタは、ほとんど世界中の言語に訳されたときえ言われる『社会主義の宣伝－農民のあいだで』（*Fra contadini*）<sup>17</sup>で成功をおさめ、また『国際労働者協会の組織』と題するパンフレットも刊行している。この両者を携えてマラテスタは南米に亡命し、亡命先のブエノスアイレスでも方々の集会場で売りさばかれていた模様である。

しかし、『アナキー』にこめられた彼の思いは格別のものらしい。ここには、アナキスト・マラテスタの存在証明がこめられているのかもしれない。フィレンツェとブエノスアイレスの「アナキー」と、パンフレットになった『アナキー』を、克明に突き合わせて見る必要がある。そうすると、国際社会思想史あるいは国際連帯思想史の問題となるかもしれない<sup>18</sup>。

ヨーロッパには、国際連帯の歴史がある。これは古く、キリスト教世界の成立まで遡れる現象かも知れないが、少なくとも、ここで問題としたいのは、フランス革命以降である。革命末期「テロル」あるいは「革命暴力」が登場する。ついで、革命を潰そうとする国際的な「国家暴力」と、これに対抗するナポレオンの、ついにはヨーロッパ全土への侵略になった暴力が展開する。そして、フランス革命の人権思想は、この暴力に乗って、ヨーロッパ全土に広まる。圧政に抵抗する流れが次第に大きな流れになる。人権抑圧、民族抑圧、階級抑圧、、、に抗する闘争が、国境を超えて展開する。それらは、ロシアのデカブリストの「乱」であれ、数々の民族「蜂起」であれ、ファシズムへの「レジスタンス」であれ、「暴力」と「協力」の問題を避けて通れない。そこには、おのずから、人間であれ、思想であれ、国境などの人為的境界を超える、大きな流れが形成された。国際的な協力や国境を超えた連帯関係の形成であり、その流れのなかで、生き、働く男女のいきいきした存在と活動が生まれた。

フランス革命後の独裁と戦争をめぐる政治的転換のなかから、「自由と平和」を掲げたもう一つの勢力もまた育っていた。農業、製造業、商業に従事する「産業者」に注目し、この、広い意味での「働く人びと」（フランス国民の25分の24）を基礎にした新しい社会組織を提起したのは、サン・シモンであった。「社会の成員に、その能力の発展のために、最大の自由を与える」ためである。サン・シモンとサン・シモン派は、この、権力的ではない、広い意味での「働く人びと」の連帯という協力関係に、「アソシエーション」という言葉を与えた。1830年前後にヨーロッパに生起してくるさまざまな「社会運動」は、多かれ少なかれ、この思想の圧倒的な影響下にあり、それは現代の私たちの処にまで届いている。いまや国境を超えてグローバルに輪が広がっている、権力意志なき無数の人びと（モルティトゥーディネ *moltitudine, multitude*）のボランティアな協力関係は、かつて1830年代にヨ

<sup>17</sup> 『農民の中で』は、現在までに、イタリアだけで初版以来30万部を売り、翻訳も加えると、100万部近くになると見積もられている。Ortali e Berti, *Rivoluzionario tutta la vita*, 《rivista anarchica》, cit.

<sup>18</sup> 示唆に富むのは、ブオナローティ、マツィーニ、バクーニンの、ヨーロッパ社会共和国形成への運動と叢生する働く者たちのアソシエーション運動の双方に注目したレーニングの仕事である。Arthur Lehning, *From Buonarroti to Bakunin. Studies in International Socialism*, Leiden, Brill, 1970.（レーニングは、膨大なバクーニン・アルシーフの編者でもあった。）



ヨーロッパの働く人びとが獲得しつつあった自意識、すなわち、「戦争をする国家」や「君主の神聖同盟」を否定する「自由と平和と労働と相互扶助の神聖同盟」という、国境を超えた自意識の獲得（これこそ、本稿の主人公・マラテスタの言う「インタナショナル」の意味である（後述））と通底する。

マツィーニもバクーニンもまたマラテスタも、まさにこの「モルティトゥーディネ」の側から、人間の幸福を実現する、という課題に取り組み、それを背負って生きた人びとである。しかし、「近代」に生きた彼らもまた、「国家暴力」と「革命暴力」の問題を避けて通ることは出来なかった。

### (3)

エッリーコ・マラテスタは、ブルボン王朝支配下の南イタリア、ナポリ近郊の町に生まれた。父の名はフェデリーコ（Federico）、1815年ナポリ生まれ、母はフランス人でラッザリーナ・ラストーイン（Lazzarina Rastoin、ラストワンと発音したのかもしれない）。出生証明を見ると、父には敬称のドンがふられ、新生児の正式名称は、エッリーコ・ガエターノ・マリア・パスクワレ、良家の子弟に付けられた長い名である。彼は三人兄弟で、兄アニエッロ（Aniello）は、二つ年上、弟アウグストは四つ年下である。この他にも、結核で早世した姉ともう一人兄弟がいた模様である。イタリア統一後の1864年、エッリーコ11歳のとき、一家はナポリ市内に転居し、ナポリ大学に程近いところに住居を構える。同年の秋、遠いロンドンでは、インタナショナル、国際労働者協会が発足している。やがてその影響はこの都にも及ぶであろう。アニエッロとエッリーコは敬虔なスコローピ学院で大学入学の準備に入る。この同じスコローピ学院に、のちのマラテスタの緊密な同志となる、三つ年下のフランチェスコ・サヴェリオ・メルリーノもまた学んでいる。やがてエッリーコは兄に従って、大学周辺に活発に展開していた、王政に反対するマツィーニ派の学生共和主義運動のなかに入り、アクティヴな一員となる。この頃の自分について、マラテスタは後年、次のように物語る。

「私は、万人が喜びのうちに愛しあう世界を夢見ていた。[...] 現実に帰ってあたりを見回すと、ここには、飢えと寒さに震え、みじめに一片のパンの喜捨を乞う人を、かしこには、泣く子供たちを、その向こうには呪いの言葉を吐く人びとを見たのだった。」「私の心臓は恐ろしさで凍りついた。その後、私はより注意深く観察し、巨大な不正、馬鹿げた組織が人類を圧迫し、人類に苦しみを与えているのに気づいた。すなわち労働は卑しめられ、ほとんど恥ずべきものとされていた。労働者は彼の悪徳の主人を饗宴に送るために、飢えて死んでいた。私の心臓は怒りで膨れ上がり、グラックス兄弟のことを、またスパルタクスのことを思い、私の中に一人の護民官と一人の反乱者の魂を感じた。」

「そして、共和国の中では万人が平等である、としばしば聞いたので、また何処でもどんな時代でも、貧民と奴隷による反乱の声は、この共和国という言葉と混ざりあっているように見えたので、[...] 私は自分を共和主義者と呼び、私の心の中に宿るすべての願望、すべての怒りを、この言葉で要約したように思ったのだった。」「私は、この共和国がどんなものか、あまり知らなかった。だが、それを知っていると感じ、それで十分だった。」

つまり、私にとっては、共和国とは、平等の、愛の、喜びの王国だった。それは私のファンタジーの愛のこもった夢が、現実になったものだった。」<sup>19</sup>

<sup>19</sup> Malatesta, *La repubblica dei giovanotti a quella degli uomini colla barba*, in: 《La Questione Sociale》 del 5 gennaio 1884, また、戸田三三冬「1871年ナポリ青年群像－エッリーコ・マラテスタ序章」『イタリア文化研究』第20号（1982年）、131頁参照。

統一直後のナポリは、人口44万。当時、大都市と言われた諸都市の人口は、ローマ18万、ミラノ24万、トリノー（統一時、首都）20万、ジェノヴァ15万、フィレンツェ14万、パレルモ19万、ヴェネツィア12万（いずれも1861年末統計）であるのを見れば、イタリア最大の都市であったことが分かる。元来、ナポリ市とその周辺の「テラ・ディ・ラヴォーロ（耕作の地）」と呼ばれて来た地域は、ブルボン王朝支配下の南イタリアにおいて、最も人口密度の高い産業の発達した地域であった。首都ナポリの海にのぞむ王宮からは、はるかかなたに、ヴェスヴィオ火山がその雄姿を見せている。ここには宮廷とそれをめぐる社交界が存在し、重要な商社や銀行が置かれ、また南伊唯一の大学所在地として、全土から学生や知識階級の集まる知的活動の中枢でもあった。

ブルボンの宮廷生活に必要な物資を生産する、伝統的な手工業も多彩だった。ヨーロッパ中に人気のあった帽子、ブラシ、革手袋などのほか、膠（にかわ）、櫛、陶器、ガラス、製本と印刷、造花、日傘、レンズ、楽器、絵具、ペンキなどの生産であり、これらに従事する職人も層が厚く、近郊地域にも広がりを見せていた。因みにマラテスタの父親も、ナポリに移る前は、皮なめし工場を経営していた。織物業の勃興にはスイス、フランスなどの外国資本の参加も見られたが、金属機械工業は、もっぱら政府保護か外国起業家の活躍によって発展した。こうして1840年代を通じて、広汎な都市プロレタリア層が生み出されていた。伝統的な職人層に加えて、近代的な金属機械を生産するピエトラルサ工場、アルセナーレ（造船所）、港湾、印刷業の労働者たちであり、ナポリ市は、これらのプロレタリアートが多数集中している南伊唯一の都市だった<sup>20</sup>。後述するように、イタリアで初めて、インタナショナルのセクションが出来た、先進的な労働運動成立の背景には、このような伝統的な南部社会の存在があったことを考えねばならない。

さて、北伊ピエモンテ、サルデーニャ王国を盟主としての統一イタリア王国形成後は、一地方都市に過ぎなくなったナポリとそれに依存していた南部経済の急速な失墜が始まる。しかし、この時点では、なお、旧ブルボン王朝支配文化の濃厚な名残りを残し、シチリアおよび南伊の文化的中心として、機能していた<sup>21</sup>。しかし、この事情を旧ナポリ・シチリア王国の住民の目からみれば、イタリア王国の成立とは、北伊による南伊の併合に他ならなかった。事実、旧サルデーニャ国王のヴィットリオ・エマヌエーレがそのまま現イタリア国王となり、ピエモンテの法律がそのまま適用されて、地方自治は許されず、国王任命の州知事が全国を押さえた。議会はできたが、名ばかりで、全国民の2パーセントの富裕な者にしか選挙権がなかった。南伊は、統一イタリア王国のいわば国内植民地となり、徴兵と重税に悩まされる。イタリアの富国強兵は、北伊の工業化のため徹底的に南伊を収奪する構造にあった。南伊住民の呪詛は大きく、ブリガンタジヨ（山賊行為）と呼ばれる農民反乱が頻発した。やがて食えない住民は、移民という形で、ヨーロッパ各地や南北アメリカ大陸への、グローバルな労働力供給を支える重要な存在となってゆくのである。

1860年10月、マッツイーニ（Giuseppe Mazzini, 1805-1872）は、ここに共和派の新聞《ポーポロ・ディターリア》（イタリアの人民）を創設する。マッツイーニ派の運動の拠点となるこの編集部には、最良の南部民主派の知識人が集まり、マッツイーニ派労働組合運動のネットワークもここを中心に発展してゆく。ここで「民主派 democratici」というのは、王政による外交戦略・国際政治的な統

<sup>20</sup> 上掲「1871年ナポリ青年群像」参照。

<sup>21</sup> このナポリにおける都市産業を背景にした共和派・民主派および初期社会主義運動については、文書館史料を駆使した、今では古典的な詳細な研究が基礎となる。参照：Alfonso Scirocco, *Democrazia e socialismo a Napoli dopo l'Unità (1860-1878)*, Napoli, Libreria Scientifica Editrice, 1973.

一に反対し、ポーポロ（マッツイーニの文脈では、サンシモンの25分の24。特権を何ら持たずに、働く大多数、モルティトゥーディネ *moltitudine* をさす）の意志で共和国を下から形成しよう、という「共和派」のことである。

この《ポーポロ・ディターリア》の編集部を、ガリバルディの紹介状をもったバクーニンが訪れたのが、1865年6月。統一はなったが、頻発する労働者のストライキや深刻な社会問題で揺れているナポリに、ロシア人革命家は、妻を連れた短い夏の滞在のつもりでやってきたのだった。この時バクーニンは、すでに彼の最初の社会主義綱領をもち、前年秋にはロンドンでマルクスとも会い、労働者インタナショナルとしての国際労働者協会の設立（64年9月）をも知っていた。ほどなく、バクーニンと編集部に集まる南部民主派の間にゆるい連帯の輪ができる。後にスペインへアナキズムを伝えに行くファネッリ、シチリアの医者で自然医療のオメオパチアを研究するフリッシャ、弁護士のガムブツィ、イタリアで最初の社会主義新聞《自由と正義》（*Libertà e Giustizia*, 1867年）の編集責任を負うデ・ルーカなどは、最初のバクーニン・グループを形成する。この交流の中から、バクーニンの思想の成熟と南部民主派の社会主義への目覚めが起こってゆくのであり、事実、バクーニンの最初の「アナキスト」宣言<sup>22</sup>は上記の《自由と正義》紙上においてである。1869年のこの都におけるインタナショナル・ナポリ・セクションの創設は、すでにスイスに去ったバクーニンの絶えざる呼び掛けのもとに、いわば、バクーニン・グループの知識人と労働者層との間の合作として行なわれたのである<sup>23</sup>。

1871年3月、エッリーコ・マラテスタが、大学医学部入学後も、熱烈な共和主義者として学生運動の渦中にいたとき、プロイセン（ドイツ）との戦いに破れたフランスでは帝政が倒れ、新しい共和国が生まれていた。パリ民衆は、祖国防衛を放棄し、ドイツとの休戦を求めるブルジョア共和国政府に反対して、都市パリを自らの手で守り、コミューン自治を打ち立てるために立ち上がった。1871年3月18日、パリ・コミューンの開始である。学生たちの動揺は激しかった。当時、パリからのニュースは、二日遅れの新聞報道を通じてナポリに届く。むさぼるように新聞を読んでも、いまひとつ蜂起の性格がわからない。パリでは、数々の自治を守る民主的布告が出されている。共和主義に対する社会主義の反乱だという者、インタナショナルが指導しているという者、、、。カフェでは学生や知識人の議論が沸騰していた。マラテスタとその仲間たちが、ナポリ・インタナショナルのメンバーで青年弁護士のカルメロ・パッラーディーノに出会ったのは、そのようななかであった。

パッラーディーノは、マラテスタたちの強い関心に答えて、社会主義思想をさらにくわしく紹介した。この時紹介されたのは、おそらくプルドンのアナキズムであり、自由連合思想であり、バクーニンの自由と連帯の思想、人民に対する知識人の役割だったのではないだろうか。程なくしてマラテスタたちは、インタナショナルを訪れる。パリ人民の反乱は、共和国軍隊の血の弾圧で5月27日、落城する。共和国ではすべての人が幸せになれ、社会問題も解決できる、と聞かされていたエッリーコの夢は現実の前に無残に砕けた。エッリーコ・マラテスタは、このパリ・コミューンの間に、学生運動の仲間たちと一緒に、共和主義から社会主義の運動に決定的に移動した。すなわち、この都市に1869年以來存在していたインタナショナル（国際労働者協会、第一インタナショナル）ナポリ・セクションに加入し、労働者たちと一緒に活動を始めたのである<sup>24</sup>。

<sup>22</sup> Michele Bakunin, *La questione slava*, in: *Scritti napoletani (1865-1867)*, a cura di Pier Carlo Masini, Bergamo 1963 および上掲「平和の方法としてのアナキズム」196-199頁参照。

<sup>23</sup> 上掲「1871年ナポリ青年群像」参照。

<sup>24</sup> 同上。

## (4)

さて、ナポリのインタナショナルは、創立時の会員は1200人、1年後には2200人を数え、シチリアのシャッカと近郊のカステッラ・マーレの造船所労働者を含めると、3000人に達していた。皮革工のストライキを支援して弾圧され、組織は解散を命じられたが、すぐに秘密裏に再建され、70年末には250人まで回復した。ここに、71年5月、上述したマラテスタら共和派学生運動からの集団的な加入者を得て、活動のピークを迎える。

マラテスタはただちに、労働者やその家族の夜学校の世話役を引き受け、約50人の成年や未成年者に、アルファベットや文法を教えた。警察に押取された会計帳簿が残っているが、彼は「会計係」としてここにサインしている。71年末インタナショナルは、新たに「ナポリ労働者連合」(Federazione Operaia Napoletana)を名乗り、72年初めには、連合機関紙で週刊の《ラ・カムパーナ》(鐘, La Campana, 全10号)を発刊する。マラテスタはこの「連合書記」となり、ロンドンの国際労働者協会・総評議会の通信員としてナポリ連合に参加したカルロ・カフィエーロ<sup>25</sup>(Carlo Cafiero, 1846-1892)や古参の者たちとともに、機関紙発行の責任を負う<sup>26</sup>。

この新聞は1号から10号まで(1872年1月7日-3月17日)しか出なかったが、「ナポリ労働者連合」の機関紙として、イタリア社会主義運動史上、重要な位置を占めている。全体の論調は、フランス革命の人権宣言をさらに押し進める立場にたち、1832年のリヨン蜂起、1848年の血の弾圧にすでに予告され、前年のパリ、コミューンの、ブルジョア共和派によるプロレタリアート共和派の血の弾圧、という歴史的経験において、いまや、働く者・プロレタリアートの自己表現「社会主義」のみが、以下に紹介する綱領に見るように、「人間の顔をしたすべての生命ある者」の歴史を前進させる力をもつものであることを、繰り返し、自ら確認し、宣言しているのである<sup>27</sup>。

タブロイド版の見開き4頁建で、第一面の上半分は繪と題字である。一人の労働者風の男が喜ばし気に鐘を打鳴らしている。鐘の響くかなたから、三、四人の男女の若者が元氣よく手をあげてこちらに歩み寄るところである。その背景には、ナポリを象徴する、煙を吐くヴェスヴィオ火山が描かれ、今や光を射して朝日が上るところである。朝日の中には「平民たちのリソルジメント(RISORGIMENTO DEI PLEBI)」という字が読める。ナポリの地で平民たちの手による「イタリアの再生」に着手するぞ、との宣言であろう。題字の下には、「社会主義者の機関紙」と飾り文字の書き込みがあり、全体の繪の下には「義務なしに権利なく、権利なしに義務はない」と、インタナショナルのモットーが刷り込まれている。繪が発するメッセージは強烈である。「鐘」という命名は、ロシア・ナロードニキの父・ゲルツェンが亡命地のロンドンで刊行していた《コロコル》(鐘)に因んだものであろう。彼の『向こう岸から』はこの頃よく読まれていた。

ここでは、第9号(2月18日)に載った「ナポリ労働者連合」の綱領と、第10号(3月17日)の、マラテスタの筆になると信じられる、マツターニへの追悼文を紹介しよう。マツターニは、パリ・コミューンに反対の論陣をはりつつ、この3月12日に亡くなったばかりなのである。

「ナポリ労働者連合は、次の諸原則を認め、宣言する。

- 1 人間の顔をしたすべての生命ある者は、平等である。そして万人が同一の権利と同一の義務をも

<sup>25</sup> カフィエーロについて次ぎのものは、もはや古典であろう：Pier Carlo Masini, *Cafiero*, Milano, Rizzoli, 1974.

<sup>26</sup> 戸田三三冬「ナポリ《ラ・カムパーナ》考(その一)」『史艸』第27号(1986年11月)参照。

<sup>27</sup> 同上、(その二)『史艸』第28号(1987年11月)、75頁参照。

- つゆえに、義務なきところに権利なく、権利なきところに義務はない。
- 2 労働は人間にとって必要であるゆえに、万人は労働する義務をもち、また万人は、自分の労働の全成果を享受する権利をもつ。
  - 3 まさにこのゆえに、労働手段と原料は人類に属する。そして万人は、自分の活動領域において、それを利用する権利をもつ。
  - 4 すべての誕生する個人は、育てられ、養われ、技術的、全面的かつ平等に、その個人に結合している集団によって教育される権利をもつ。またこの集団は、知識の全領域において、その個人の自由な選択を保障し、擁護する義務をもつ。
  - 5 個人また集団の結合、結社および連合 (l'unione, l'associazione e federazione) は、下から上へと自発的に生まれるものでなければならない。
  - 6 これらすべてが実現することは、われわれにとっては、プロレタリアートの真の解放 [が実現すること] である。それは、そこにわれわれのすべての努力を傾けねばならない、偉大な唯一の目的である。それゆえにこそ、この努力は、新しい特権をつくり出すためではなく、権利と義務との世界的平等を築くために向けられるものである。
  - 7 労働の大義は国境を知らない故に、世界以外に祖国をもたない。また、世界の働く者すべての満場一致の同意なしには、勝利することはできない。ナポリ労働者連合は、どのような地点の上であれ、同一の目的を定めそれに従って設立された、すべてのグループならびに労働組合 (Società Operaie) と団結する。但し、その際、後者は、その最も完全な自由と自治を放棄することはない。」

この綱領をもつ「ナポリ労働者連合」は、発足当初の1872年1月、会員数約50人、連合のなかには、職業別の組合が合流し、なかでも重要なものは、金属機械工組合、皮なめし工組合および印刷工組合であった。職業別の組合を作るに至らない労働者たちのためには混合組合があった<sup>28</sup>。また多数の女性会員がおり、会合や夜学に出席していた。インタナショナルが中心になってこれら女性会員や一般市民からなる女性委員会が作られ、毎週1回定例会をもっていたことも、特筆すべきであろう<sup>29</sup>。当時、学生や知識人でインタナショナルに参加した人びとは「思考労働者 (Operaio del Pensiero)」と呼ばれていたが、マラテスタは、金属機械工組合の「腕の労働者 (Operaio del Braccio)」たちと行動をとともにし、「腕と思考の労働者」であることを目指していた<sup>30</sup>。こののち彼は、若き日のこの願望の通りに、生きることになるであろう。

さて《ラ・カムパーナ》最終号となった第10号の一、二面はマッツィーニ追悼、三、四面は、パリ・コムニオン追悼である。この号は当然、発禁・押収の処分を受ける。両方とも、国家の側から見れば、「良風美俗」を攪乱し、イタリア王国にたいする「国家反逆」を意味するからである。

ナポリ警察はこの両追悼文が、カフイエーロとマラテスタの執筆による、と疑っている。マッツィーニ追悼の散文詩が、当時の彼の心の軌跡を辿ると、マラテスタのものであろう、と推定したのは私

<sup>28</sup> Alfonso Scirocco, *Democrazia e socialismo a Napoli dopo l'Unità*, cit., pp. 287-289.

<sup>29</sup> Carlo Caffero a Engels, Napoli, 27 novembre 1871, in: *La corrispondenza di Marx e Engels con Italiani 1848-1895*, a cura di Giuseppe Del Bo, Milano, Feltrinelli, 1964, p.91. 戸田三三冬「近代国家イタリアにおける〈社会問題〉の登場と女性たち」『婦人通信』1988年3月号。

<sup>30</sup> Misato Toda, *Errico Malatesta da Mazzini a Bakunin*, cit., pp. 78-82.

である<sup>31</sup>。ベルティは新著においてこれを踏襲し<sup>32</sup>、執筆者をマラテスタとして次のように述べている。

「共和主義との政治的決裂は、彼をマツティーニ主義のエートスに結び付けている深い絆を打ち砕くことはできない。それはマラテスタが決して放棄せず、全生涯それに忠実に生きることになるだろう、ひとつの精神的遺産なのである。」これは、さきに紹介した対談におけるベルティの発言の本質的内容に関わる立論である。ここでは十分に論ずることは出来ないが、私も同意するところである。少し長いが、この散文詩の大半を訳出してみよう。

「君主制の恐怖・弾劾たる  
ジュウゼッペ・マツティーニに  
ナボリの社会主義者たちは  
約束する  
社会革命をもつての  
決然たる復讐を」

「何故に、私の手は震えるのか——何故に、頭の中にもつれた考えが次々と浮かぶのか——何故に、こうも胸騒ぎがするのか——何故に、まつげは辛うじて、苦しみに燃える涙を押えるのか？

何事か？—私は、無神論者、社会主義者、インタナショナルではないのだろうか？——私は、パリの煽動者たちの兄弟ではないのか？——そして、おまえ、昨日、論的としてのマツティーニについて書いた私のペンよ、多分おまえが、そうではないのだろうか？

ああ、しかし今日、私には休戦の必要がある。そうだ。この苦しい闘いの休戦の必要だ。——私をしてこの紙の上に喪章をつけた愛情の言葉を記さしめよ。この新しい墓の上に、いまだ私の涙がしたり落ちるままにさせよ。

何故に、否だ？——強力な党首に対して、強力な敵に対してこそ、われわれは怒りの言葉を投げたのだ。けれども、研鑽と心痛に苦しみ悩んだこの死骸（むくろ）を前にして、われわれの唇に、若き頃の言葉が蘇ってくるままにさせよ。ひとときを愛するために、またひとときを涙を流すために、われわれを自由にさせよ。

ああ、何という悲しみか。話しつつ汝を愛撫していたかの唇が、唾になったと知るとは。大いに愛したかの心臓が、もはや動かないと知るとは。動かぬ、彼、活動の奇蹟だった彼が死ぬとは！」

「イタリアの青年たちよ。もし他によい方法を知らないのなら、行って人里離れた部屋にこもり給え、そして彼がかつて君たちに物語った信念と愛に満ちた言葉を読み返し給え。——イタリアの娘たちよ、黒衣に身をつつみ給え。それは沈黙した詩的イタリアの最も美しい表現なのだ、そして永遠にそうなのだ！

何という生涯！——どれほどの思い出！ どれほどの栄光だろう！」

「マツティーニは一つの名前ではない。それは一つの時代である。彼の中に、あのブルジョワジー、封建制の廢墟の上に、市民的平等という至高の記念碑を築いたブルジョワジーの、最後の歴史的時代が要約されているのだ。」

<sup>31</sup> Cfr. *ibidem.*, pp.74-75. また上掲「《ラ・カムパーナ》考」（その一）、53-55頁参照。

<sup>32</sup> Giampietro Berti, *Errico Malatesta e il movimento anarchico...*, cit., pp. 15-16.

「彼は第三のローマを夢みた。それは強力な統一イタリアの中心であり」「世界の諸国民に (ai popoli dell' universo) 権利と義務の言葉を、調和と自由と市民的使命という説明をするローマだった。——それは夢だった！——それは、過去的美を未来と調和させた統合 (ジンテーゼ) だった。——それは一つの新しい宗教、愛の宗教、義務の宗教、統一についての犠牲の宗教だった。その統一とは、理想と信仰のための統一、善のために正直であることを目指す統一、調和のための諸要素の統一だった。

人類は歩む。歴史は無情に蚕食的に進展する。しかし、偉大なる人物たちは不滅にとどまる。そしてその間で、巨人のようなこの人間は、ひいでた端正な額によって、愛情ある魂によって、鉄の意志によって、詩人の心によって、際立っている。ジウゼッペ・マッツイーニよ！

マッツイーニ主義者と社会主義者、統一主義者と連合主義者、理神論者と無神論者、あらゆる党派とあらゆる地方 (パエーゼ) の正直な人びとよ、頭 (こうべ) をたれ給え。この偉大なる影が、生命から歴史へと過ぎ去ってゆくのを、敬意をもって見守ろうではないか！

そして、歴史は言うであろう。ジウゼッペ・マッツイーニよ。汝の歴史は、心臓と頭脳のある統一であったと。汝のみひとり、懐疑の世紀にあって信じ、かつ信じさせた。また汝は、決して欺かず、決して変わらず、人間にして可能なかぎり愛されたと。汝の敵によってすら、あたかも父であり、友人であるかのように遇されたと。」

## (5)

この数カ月後、パリ・コミューンの影響下に続々と形成されたイタリア各地の社会主義運動のグループ<sup>33</sup>は、リーミニに集合して、「インタナショナル・イタリア連合」を形成する。1872年8月のことである。この時の議長はカルロ・カフィエーロ、書記はアンドレア・コスタ (Andrea Costa, 1851-1910) である<sup>34</sup>。ここで特記すべきことは、このイタリア連合は、その初めから、ロンドンの総評議会との絶縁を宣言して出発したことである。社会主義の歴史上、あまりにも重大なこの経緯については、粗いデッサンであれ、やや立ち入った説明が必要であろう。これよりさき、ヨーロッパでは、インタナショナル内部の分裂が進行していたのである。マラテスタは後年、この事情を次のように説明している。

「インタナショナル内部に、早くから二つの傾向が現れた。一つは権威的で中央集権的であり、他の一つはリベルタリアンであり連合主義的であった。この二つの傾向は、インタナショナリストたちを、二つの敵対する派閥に分けることとなり、少なくとも彼らの内で極端な者たちは、マルクスとバクーニンから、その名前を採用したのであった。」<sup>35</sup>

この対立はパリ・コミューン敗北の評価にも関わる、思想的対立だった。バクーニンがパリ・コミ

<sup>33</sup> Cfr. Aldo Romano, *Storia del movimento socialista in Italia*, 3 voll., Bari, Laterza, 1966; Pier Carlo Masini, *Storia degli anarchici italiani da Baunin a Malatesta (1862-1892)*, Milano, Rizzoli, 1969; Eva Civolani, *L'anarchismo dopo la Comune*, Milano 1980, ecc.

<sup>34</sup> *La Federazione Italiana della Associazione Internazionale. Atti ufficiali 1871-1880*, a cura di Pier Carlo Masini, Milano, Eizione Avntil, 1964, pp. 36-37.

<sup>35</sup> Errico Malatesta, *La Prima Internazionale*, in «Pensiero e Volontà» del 15 settembre 1924, ora in: *Errico Malatesta Pensiero e volontà, Scritti*, vol. III, Ginevra, Edizione del "Risveglio", 1936 (reprint, Carrara, 1975), p. 112.

ューンをコミューン自治と連合の問題と捉えたのに対して、マルクスは、プロレタリアート独裁の問題として捉えた。従って労働者階級の政治的指導の必要性（権力の問題）が浮上した。そして、総評議会の権限を拡大しようとする、マルクスとエンゲルスの新方針が打ち出され、1871年9月17-23日、総評議会の召集する、非公開の「ロンドン協議会」が開催された。この詳細な経過は、渡辺孝次氏の『時計職人とマルクス—第一インタナショナルにおける連合主義と集権主義』（同文館、1994年）に譲る<sup>36</sup>が、この協議会は、本来インタナショナルの総会に掛けられるべき諸事項を、非公開の会議でマルクスとエンゲルスの主導下に行なってしまった。それは、インタナショナル発足の時からの、諸グループや連合体の自治と独立の原則に抵触するものだったので、内容が知れるや、スイス、スペイン、ベルギーから、たちまち抗議の声が巻き起こった。最も問題となったのは、政治活動を義務づける「決議9条」である。それには「労働者階級を政党に組織する」という文言が成文化された決議に入っており、その指導にあたるために、総評議会の権限を強化する、というものであった。この「マルクス」派の新方針は、その決定のプロセスの不明瞭さを別にしても、自由連合主義にたつ「バクーニン」派の路線を真っ向から否認するものであった。なかでも、スイスのジュラ地方・時計工のグループは、1871年11月、ジュラ地方のソンヴィリエで大会を開き、「ジュラ連合」の結成と、総評議会の「権威主義」を批判する「ソンヴィリエ回状」（原文フランス語）をインタナショナルの全連合体に送ることを決議した。11月末に回状は発送され、ナポリにも届いた。

《ラ・カムパーナ》第3号（1月21日）あたりから、シチリアのフリッシャの手紙などを通して、回状への支持、ロンドン協議会の諸決定への反対、この異議申し立てに対してはインタナショナルの総会のみが決定する権限をもつ、という声が紹介され、第5号（2月4日）には、この回状のイタリア語訳が掲載されている。ナポリの新聞は、この問題に関してはほぼ中立を保ったまま、刊行を停止した。ここでは、その後の経緯にふれるゆとりはないが、6月、総評議会の通信員であったカフィエーロが、ロンドンと決別する。その後の展開は、上に述べたように、インタナショナル・イタリア連合が、最初から総報議会との絶縁を宣言して、成立することになったのである。これは、インタナショナル全体としてみても、異例であった。

一ヶ月後の9月は、思想的に対立する二つの国際大会が、別々に開催された。初旬にはオランダのハーグで、主流派の総評議会の主宰する国際労働者協会の大会（マルクス中心）が行なわれ、決議9条のなどの他、バクーニンとジュラ連合のジェームズ・ギョームの除名を可決した。そして総評議会をニューヨークに移すことを決定した<sup>37</sup>。中旬には、スイスのサンティミューで、「連合派（反権威）インタナショナル」の結成大会（バクーニン中心）が行なわれ、インタナショナル・ナポリ連合は、ここに連合代表を送ることになる。代表の一人に選ばれたエッリーコ・マラテスタは、この時はじめてバクーニンに憧れの会見を果すのである。この新しい「連合派インタナショナル」の成立をもって、「諸グループの集団的な原則として」「アナキズムが誕生した」と、マラテスタは半世紀後に述べている<sup>38</sup>。

このあたりの雰囲気や、マラテスタのバクーニンに対する回想「私が初めてバクーニンに出会った

<sup>36</sup> なお、自由連合派に光をあてて画いた福井憲彦氏の先行論文がある。「＜反権威＞インタナショナルの歴史」（上）（下）、『社会運動史』第4号（1974年）および第5号（1975年）。

<sup>37</sup> ロンドン協議会、ソンヴィリエ回状、スイスの地域的事情、またマルクス派の多数派工作の詳細な分析については、渡辺孝次、上掲『時計職人とマルクス』211-332頁参照。

<sup>38</sup> Malatesta, *La Prima Internazionale. A proposito del Cinquantenario del Congresso di Saint-Imier*, 《Umanità Nova》 n. 187, 9 settembre 1922, ora in : *Scritti*, vol II, Ginevra, 1935, (reprint, Carrara, 1975), p. 158.



ときのこと」に聴こう。<sup>39</sup> マラテスタ18歳である。いささか長い引用となる。

「あれは1872年の夏の終わり、ナポリでだった。

「働く者たちのインタナショナル・ナポリ連合」(La Federazione Napoletana dell'Internazionale dei Lavoratori)は、カフィエーロと私をスイスで開催されることになっていた(事実それはベルン州ジュラ地方のサンティミエで行なわれた)大会の代表に任命した。この大会は、総評議会に対して、決然と闘っていたすべてのインタナショナルのセクションの間に合意を形成するためのものだった。総評議会はカール・マルクスの指導のもとに、すべてのアソシエーションを総評議会の独裁的な権威下で支配しようと望み、また政治権力の破壊ではなく、政治権力を獲得する方向へ、アソシエーションを導こうとしていたのである。

私は、インタナショナルの運命と革命的・社会主義的な活動の未来がそこに懸かかることになるべき、これらの闘争にまったく心を奪われていた。

若者の初陣だった。もちろん私は、大会に行けること、全地方の同志と直接の関係に入れることを心から喜び、そしておそらくまた、私の声を皆に聞かせられることを誇りにも思っていた。あの年齢では、まったくの間抜けでもない限り、少しばかりうぬぼれが過ぎるのだ！とりわけ私を興奮させていたのは、バクーニンを相識り、彼の個人的な友人になるだろう(私はそのことを疑っていなかった)という考えだった。

ナポリにおけるバクーニンは一種の神話だった。彼がナポリに滞在したのは、1864年と1867年だったと思う[バクーニンのナポリ滞在は1865-1867年である]が、深い印象を与えた。[中略]ある人びとにとっては、バクーニンは北方の野蛮人で、神も無く、祖国も無く、いかなる神聖なものも尊敬せず、イタリアとラテンの聖なる文明に対する脅威であった。別の人びとにとっては、ナポリの伝統のよどんだ沼の中へ、健全な一陣の風を吹き込み、彼に近づいた若者の目を、新しい広大な地平に高く開いた男であった。すなわちその若者とは、ファネッリ、デ・ルーカ、ガムブツツイ、トゥッチ、パッラディーノ、のような人びとであり、彼らが、ナポリとイタリアにおける、最初の社会主義者、最初のインタナショナルリスト、最初のアナキストであった。

だから私としては、そんなふうに話されるのを何度も耳にしたお陰で、私にとってもバクーニンは、伝説中の人物になっていた。そして彼を知り、彼に近づき、彼の火で暖まることが、私にとって燃えるような願望となり、ほとんど強迫観念にまでなっていたのである。

夢は実現されようとしていた。

さて、私はカフィエーロと一緒にスイスへ出発した。

あのころ、私は病身で、血を吐き結核だろうと診断されていた。その上私は、胸の病気で、両親、一人の姉妹、一人の兄弟を亡くしていた。夜にゴツタルド峠を越える時(当時はトンネルは無く、雪の山を急いで越えねばならなかった)、私は風邪をひき、バクーニンが滞在していたチューリヒの家に、夕方、咳とに高熱に襲われて辿り着いた。

最初の歓待が終わると、バクーニンは私を長椅子に寛がせ、その上に横になるようにと、促した、というより殆ど強いた。そして、ありたけの毛布と、一緒に掛けられるだけの外套で私を覆った。煮

<sup>39</sup> Malatesta, *Il mio primo incontro con Bakunin*, 《Pensiero e Volontà》 n.11, 1 luglio 1926, ora in: *Errico Malatesta Pensiero e volontà, Scritti*, vol. III, cit., pp. 244-248.

立ったお茶をくれ、静かにして眠るようにすすめた。心配りと母のようなやさしきで為されたこうしたことすべては、私の心に沁みわたった。

すっぱりと覆いに包まれて横たわり、皆は私が眠ったと思い込んでいるとき、私はバクーニンが低い声で話しているのを聴いた。私を賞賛して喜ばしいことを言うてくれてから、もの悲しく言葉を継いだ：《なんて残念なんだ。彼がこんなに病気だなんて。もうすぐわれわれは、彼を失うだろう。六ヶ月もつまい。》私が死ぬことができるなんて不可能にみえていたから（今だって、それを信じるのには努力を要する）、私は悲しい予想に重きを置かなかつたけれど、考えた。人類のためにやるべきことが山ほどある今、死ぬなんてほとんど犯罪だろうと。例の人物の賞賛は私を喜ばせ、私はそれに価することは何でもしようと、自分自身に誓った。[中略]

翌朝、私は良くなって目覚めた。私たちは、バクーニンと他の人たち、スイス人、スペイン人、フランス人、と一緒に、尽きることのない議論を始めたのだった。バクーニンはこの議論に魔法のような魅力を与えることができたのである。

私たちはサンティミエに出かけた。[中略]

私たちは大会で役割を果たしてから、チューリヒへ戻った。そして絶えず議論し、同意点を見つげながら、夜更けまで草案をねった。

私がバクーニンを知ったとき、彼はすでに高齢であり、牢獄とシベリア流刑中に罹った病気に苛まれていた。しかし、いつも、エネルギーと熱狂でいっぱいになっている彼を見出し、また彼のたぐいまれな他と交感できる能力に驚かされた。彼と接触した若者にとって、聖なる火を身内に灯されたのを感じないこと、自分自身の地平が広がったのを見ないこと、自分が一つの高貴な大義の騎士であると感じないこと、高潔な提案をしないこと、こうしたことは不可能だった。

そしてこれは、彼の影響力に服したすべての者に起こったことである。その後、直接の接触が失われて、ある者は少しずつ考えと性格を変え、もっと異なった道に迷い込んでしまった。」「でも、一寸の間でもバクーニンに親しく接して、より良くならなかった者など誰もいなかったと信ずる。」「[後略]

バクーニンの日記によれば、マラテスタの到着は、9月7日、出発は23日である。日記には、マラテスタは「ベニヤミン」という名で記されている<sup>40</sup>。ベニヤミンとはヘブライ語で「南の息子」という意味だが、聖書の物語では、ヤコブの最愛の妻ラケルの忘れ形見で、ヤコブに最も愛された息子であった。バクーニンは、この時、幾つ目かの彼の社会革命綱領を執筆しており、サンティミエにおけるインタナショナル設立の機会に、そこに参加した仲間たちとの集団討議で、「革命的社会主義者同盟」の綱領と規約を完成させた<sup>41</sup>。

マラテスタが記す絶えまない議論や草稿の話は、これをめぐってであろう。この規約で「国際、民族、地域」の兄弟団が創設されたが、イタリアの「国際兄弟」団を構成するのは、カフィエーロ、コスタ、ナブルツィ、ファネッリそしてマラテスタの5人のみであった。このプログラムはみなが手分けして筆写し、イタリア語訳も、数部作られた。このイタリア語綱領は、今ではレーニングの編纂したバクーニン・アルシーフ（註参照）に収録されているが、1884年のマラテスタの裁判資料（ロー

<sup>40</sup> Max Nettlau, *Errico Malatesta. Vita e pensieri*, New York 1922, pp. 78-79.

<sup>41</sup> *Ibidem*. Anche cfr., *Programma della fratellanza socialista rivoluzionaria* (1872), in : *Archives Bakoumine*, publiées pour L'Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis Amsterdam, par Arthur Lehning, vol. V, Leiden, E. J. Brill, 1975, pp.198-205.

マ文書館)の中にあつたものという。この同盟綱領は少数の者しか知らない、最重要文書であつたから、この時から1884年まで、おそらくマラテスタが大切に保持していたものであろう。

1872年の連合派インタナショナル結成大会(9月15-16日)の会場は、サンティミエの町役場だったというが、1986年9月15日に私が調査したとき、案内されたところは、「Restaurant de la Clef」という文字がかすかに外壁の上に読める、大きな旅籠屋跡であつた。この時は農家の納屋として使われており、乾草が積まれたなかに入ってみると、階下は大広間、階上はいくつかの小部屋に分かれている。この時から正確に114年前、この大広間に、スイス、フランス、スペイン、ロシアの同志に混じって、若いマラテスタが、立っていたのだろうか。案内してくれた大男のMは、マラテスタが大好きで、ジュラのマラテスタと呼ばれているという。彼は、仲間と一緒に「Espace Noir」(黒い空間)という劇場や図書室、食堂もある協同組合を経営、文化運動を起こしている。いずれこの歴史的な建物を買い取り国際的な会合・宿泊のために使いたいと計画していた<sup>42</sup>。先日ここを訪れたエスペランティストの友人の話では、この運動は健在である。

マラテスタは、このインタナショナルのメンバーのなかでは最年少で(カフィエーロは七つ、コスタは二つ年長である)、ジュラの人びとみなに愛されたという。ともあれ、こうして彼は、この時代の最先端の運動の中核に迎え入れられ、インタナショナルの中心的課題を、生涯、双肩に担うことになるのである。

## (6)

この後の彼の行動の概要を記すと<sup>43</sup>、1874年には南伊のカステル・デル・モンテで農民蜂起を起こして敗れ、逮捕・投獄。1877年、有名な「行為の宣伝」を行なうため、カフィエーロを始め、三十数人の同志と南伊マテーゼに蜂起<sup>44</sup>、二つの寒村で支持をえて社会共和国の樹立を宣言したが、軍と警察に囲まれて敗退・全員投獄。78年の裁判では激しい法廷闘争を行なって全員無罪放免を勝ち取り、民衆の歓呼のうちに釈放された<sup>45</sup>。特筆すべきことは、このときサンタ・マリア・カプア・ヴェーテレ(マラテスタの生地である)の獄中で、カフィエーロがマルクスの『資本論』(フランス語版)から分かりやすいイタリア語のダイジェスト版を作ったことである<sup>46</sup>。この獄中では相当の自由が許されていた模様で、おそらく、マラテスタたちはこの仕事の進行を傍らで見守り、また当然その内容について、議論もしたと思われる。この時点で獄中のインタナショナリストたちが資本論の内容を把握したことは、重要である。そしてマラテスタは、恐らくこのフランス語版を自ら読んであろう。と

<sup>42</sup> この地域の調査については、戸田三三冬「チェルノブイリの年に」<リレー討論・近代の意味をなすことの意味>『歴史学研究』1988年2月号、参照。

<sup>43</sup> 彼の生涯の活動については、不十分ではあるが、上掲『日本アナキズム運動人名事典』の項目「マラテスタ」(執筆、戸田)に譲る。

<sup>44</sup> この歴史的舞台の調査については、戸田三三冬「マテーゼ蜂起(一八七七年)とアンナ・イングレーゼのこと」『歴史と地理』1985年5月号、参照。

<sup>45</sup> Misato Toda, *Errico Malatesta da Castel del Monte alla banda del Matese*, in: *Movimenti sociali e lotte politiche nell'Italia liberale. Il moto anarchico del Matese*, a cura di Luigi Parente, Milano, FrancoAngeli, 2001, pp. 137-150 参照。

<sup>46</sup> Carlo Cafiero, *Rivoluzione per la rivoluzione*, Raccolta di scritti, a cura e con introduzione di Gianni Bosio, Milano, La Nuova Sinistra, 1970, pp.28-29; Luigi Cortesi, *Carlo Cafiero tra anarchismo e marxismo*, in: *Movimenti sociali e lotte politiche nell'Italia liberale*, cit., pp.87-107. カフィエーロは出獄後の1879年、『資本論綱要』(*Il Compendio del «Capitale» di Carlo Marx*)として、これをミラノで出版し、マルクスにも送付した。マルクスはその正確な要約を評価したということである。

いうのは、獄中、時間は十分あったはずである。それに彼の母親はフランス人で、フランス語は彼にとって母語である。さらに言えば、バクーニンとの初対面の会話も、ジュラの人たちとのコミュニケーションも、彼にとっては、言語的に何の支障もなかったにちがいない。

1878年9月、出獄したマラテスタは、エジプトのアレキサンドリアへ向けて亡命の途につく。そこには、1874年蜂起のあと、この地に逃れたアナキストたちが作るインタナショナルのセクションがあった<sup>47</sup>。職を見つけて間もなく78年末に追放処分にあい、シリア行きのフランス汽船に強制的に乗せられ、バイルートで降ろされた。今度はイギリス船に乗せられ、沖仲仕をして働きながら、イタリアのリヴォルノを経由して、マルセイユで釈放された。そこからジュネーヴに行き、クロボトキンが《レヴォルテ》創刊号（79年2月22日）を発刊するのを手伝った。しかしマラテスタは、ジュネーヴ当局から追放処分にあい、ルーマニアの商業都市ブライラ（Braila）に仲間とともに赴いた。

このルーマニア滞在中の79年夏、マラテスタは、コスタの議会主義への方向転換（コスタの「離反」）の最初の徴候を、鋭く感知したと思われる。彼がスペインの友人宛の手紙（ブライラ、1879年8月15日付）に、「イタリアの情勢から、出来るだけ早くここを発たねばならない」ので返事はクロボトキン気付けにしてほしい、と書いていることは重要である<sup>48</sup>。さらに続けて「多分きみも、もう知っていると思うが、コスタはわれわれと同意見ではない。真剣にわれわれを再組織し、古くなった多くの要素から自由になって、機能的にことを運ぶために、われわれはこの機会を捉えるだろう。」

しかし、マラテスタが決然と、正面からコスタに論争を挑むのは、1883年末以降、フィレンツェで彼が初めて主筆として刊行する、前述の《社会問題》紙上においてである。そして論文「アナーキー」は、そのようななかで、第8号、9号、10号（84年5月4日、11日、18日）と、書きつがれ、掲載されてゆくのである。中断は彼の本意ではなかったが、裁判と南米亡命がこれを妨げる。しかし、ブエノスアイレスで彼がまずやったことは、同名の新聞の刊行再開であり、「アナーキー」連載の再開である。

コスタとの決裂は、政治的・戦術的な問題ではなかった。それは二歳年長の、最も年の近い「国際兄弟」の離反である。同盟綱領の第一行目は次のように始まっているのだ。「われわれは世界革命以外に祖国をもたない。」国際兄弟、最年少のエッリーコ・マラテスタ、いや「ベニヤミーノ」は、かれの存在証明を問われる。もはや命名者の「父」はいない。かれは心臓に注ぎ込まれた「アナーキーの火」に、彼自身の言葉を与えるしかない。『アナーキー』の完成は、マラテスタの南米移民体験の後で行なわれた。まさにグローバルな「資本」とグローバルな「労働」の対峙が火花を散らす「現場」のなかに身をおき、「国際的暴力」と化したグローバルな権力の正体と、それに向き合うモルティトゥーディネの国境を超えた協力を経験したなかで、かれの言葉が結晶したことを、私は重視したい。マキャヴェッリが観た権力の正体を、マラテスタは、どのように観たのだろうか？

ここから、冒頭のベルギー王立総合文書館の文書の話になる。ベルギー警察の調書<sup>49</sup>を総合すると、マラテスタは、「アンリ・マラテスタ」名義の旅券（ルーマニアのブライラで1879年発行）で、1881

<sup>47</sup> エジプトのイタリア人移民については、戸田三三冬「リビアとイタリア」、江口朴郎・板垣雄三編『交感するリビア』（藤原書店、1990年）；同「スエズ運河建設後のイタリア人移民とアラブ世界」『イスラムの都市性研究報告』第114号（1991年3月）参照。

<sup>48</sup> Max Nettlau, *Geschichte der Anarchie*, vol. III, *Die historische Entwicklung des Anarchismus in den Jahren 1880-1886*, Berlin 1931, pp.91-92 コスタが「ロマーニヤの私の友人たちへ」と題して、戦術転換の必要性をミラノの《ラ・プレベ》（La Plebe, 平民）紙に発表したのは、1879年8月3日である。

年3月12日に、ルクセンブルグ国境からベルギーに入国した。ブライラ居住者で、職業は化学者。直前の滞在地はルガノであるが、その前はパリのアルバレート街11番地に住み、化学者として薬局に勤めていた。ベルギー滞在の理由は、職業上、またマルセイユの叔母の遺産を受け取るためであると。マラテスタは3月27日に釈放されて、ロンドンに出発し、ここで7月に開催される「国際社会革命家大会」の準備に、精力的に取り組むことになる。

さて、ヨーロッパ革命運動史上名高い、この国際社会革命家大会は、7月14-20日、以下の国々を代表する40人以上の参加者をもって開催された。参加国は、オーストリア、ドイツ、ベルギー、スペイン、フランス、オランダ、イタリア、ロシア、スイス、メキシコ、セルビア、トルコ、エジプト。代表のなかには、クロボトキンやルイズ・ミッシュルをはじめ、当時名を馳せた革命家が名を連ねた。大会開催を推進したのは、ヨハン・モスト<sup>50</sup>とマラテスタであるとも言われる。イタリアを代表したのはメルリーノとマラテスタであった。諸国の秘密警察が注視するなか、出席者にはそれぞれ固有のナンバーと呼ばれた。因みにマラテスタは25番、メルリーノは26番である<sup>51</sup>。ルイズ・ミッシュルの出席のように、パリ・コミューンの受刑者たちの赦免で、フランスの社会運動も活気づいていた。マラテスタにとっては、地中海世界を経巡って情勢を見た後、ヨーロッパのさまざまな社会革命潮流といっせいに会おう、貴重な機会であった。このとき彼は、イタリア国内のインタナショナル諸セクションのほか、マルセイユ、ジュネーヴ、コンスタンチノーブル、エジプトのアレキサンドリアの諸連合からも代表を委任されている。彼の亡命遍歴は、要所、要所の運動の仲間から学びつつ活気を与える、インタナショナル・ネットワーク形成の旅であったことが推測される。

## おわりに

ふと気がつけば、本年（2004年）5月1日に成立を祝われた「拡大EU」は、第一次世界大戦後に分断された旧オーストリア＝ハンガリー経済圏の大まかな復活である。そしてエッリーコ・マラテスタと彼をめぐる世界を再構成しようとするれば、そこに、海洋の民イタリア人の世界の広がり、古代にさかのぼるコスモポリタンなディアスポラの伝統（？）が見えて来る。

ちなみに、マラテスタ生誕150年祭に重なって、『イタリア人アナキストたちの伝記辞書 (*Dizionario Biografico degli Anarchici Italiani*)<sup>52</sup>』が刊行されている。この辞書においても、「国民国家」成立以来の特徴的な移民と亡命者の数を反映して、登場人物たちは「五つの大陸と四〇の国」を覆っている。六ヶ月以上の滞在で計算すると、フランス（700人）、スペイン（260人）、スイス（230人）、ベルギー（130人）。ラテン・アメリカも多く、全体の13.5%を占め、なかでもアルゼンチンは120人と突出している。北米英語圏は9.7%で、米国には150人。アフリカ大陸は、アルジェリア、エジプトおよびチュニジアと、地中海沿岸諸国への移民全体のなかの6.2%、アジアとオーストラリ

<sup>49</sup> P. es. Interrogation, commissaire en chef de police à Bruxelles, 25 mars 1881, *Ministères de la Justice, Police des Etrangers, Dossiers Individuels*, 353081. *Malatesta Henri, Sta. Maria (Italie)*.

<sup>50</sup> モストについては、田中ひかる『ドイツ・アナキズムの成立－『フライハイト』派とその思想』（御茶ノ水書房、2002年）参照。

<sup>51</sup> Nettlau, *Geschichte der Anarchie*, vol III, cit., p. 193; Berti, *Errico Malatesta...cit.* pp.50-51.

<sup>52</sup> Diretto da Maurizio Antonioli, Giampietro Berti, Santi Fedele, Pasquale Iuso, Pisa, Biblioteca Franco Serantini, 2003. 全体は2巻で、1巻目（A-G）の2003年刊が出たところ、2巻目は2004年秋になるという。マラテスタの項は、2巻目に入っており、まだ見ることはできない。

アは極端に少なく、この地域への移民数の0.3%に留まっている<sup>53</sup>。

米国の歴史家で、自身イタリア移民の娘であるドンナ・ガバッチャは、彼女の興味深い『イタリアのたくさんのディアスポラたち』において、イタリア人たちが織りなすユニークな移住史を「コスモポリタンでインタナショナルな“世界”（“il mondo”）、とローカルで個人的な“故郷”（“il paese”）との関係」に焦点をあてて描いている<sup>54</sup>。

彼女によれば、西暦1200-1500年、かれらは地中海沿岸（この海は、アフリカ、アジア、ヨーロッパを結んでいる）に、またアルプスを越えて移住した。1500-1900年には、イタリア人の居住地は、地中海とアルプスを越え、同時に大西洋世界へも広がっていった。1900年以降は、大太平洋世界へも乗り出した。しかし長いこと「イタリア」は「国民（nation）」でも「国家（state）」でもなく「地理的なひろがり」に過ぎなかった。イタリアはユーラシア大陸からアフリカ大陸へと突き出し、地中海を二分する半島であり、そこに住むのはイタリア人ではなかった。「イタリア人」（ラテン語のイタリクス italicus に由来する）という言葉は、ローマ帝国の昔、その中に住む諸民族に外側から貼ったラベルに過ぎなかったのである。中にいる人々は、帝国支配下でも自分達を、エトルスキ、リグーリ、ヴェネティ、ガッリなどと、称していたのである。

いまでもイタリアの友人たちと話していると、「ナツィオーネ」よりは「パエーゼ」の感覚が優先する。かれらのなかでは、ナポレターノ（男）・ナポレターナ（女）、フィオレンティーノ（男）・フィオレンティーナ（女）、ミラネーゼ（男女）、シチリアーノ（男）・シチリアーナ（女）、...、と言う方が、実体的感覚なのである。ガバッチャは、「世界はどこでも故郷」（Tutto il mondo è paese）という格言をあらゆる「方言」で記しているが、これは日本語の言い方がおかしいであろう。確かにイタリア語は標準語として存在しており、今では、例えば生っ粋のナポレターノ（ナポリ語）で話せる人は少ないだろう。しかし、ナポリ人とナポリ語は同じ単語である。「パエーゼ」はナポリ、言葉はナポリ語であって「ナポリ方言」ではない。

だから彼らの「パトリオティズモ」は、愛国心ではなく「愛郷心」であり、自然に湧いて来る「生まれた処への愛」であって、外から、あるいは上から、強制するものではない。イタリア人によって考えられたインタナショナルの「連合」や「アソシエーション」は、こうした感覚が基礎になっている。これは、近代国家日本を、極めて人為的な中央集権制度とそれへの忠誠を強制する形で作り上げた、したがってパエーゼが踏みつぶされてしまった処の住民から見ると、極めてわかりにくい。イタリアでは、自分、家族、パエーゼは、人為的な国家に先行するものである。

さらに、マラテスタのアナキズム運動の向こうに、見えて来るのは、地続きのイタリアの中に流れ込んで来るフランス革命思想の力である。本稿でふれたパリ・コミューンは言うに及ばず、まず、フランス革命93年憲法が保障する「自由、共同の幸福、平等」を踏まえた社会革命という目的を19世紀革命運動に手渡した一人は、トスカーナの人、国際的革命家ブオナローティ（Filippo Buonarroti 1761-1837）であった。この流れを受け継ぎながら、イタリア国民意識の形成に大きな影響を与えたのが、次の世代、ジェノヴァ生まれのジュゼッペ・マッツィーニ（Giuseppe Mazzini 1805-72）である。本稿では晩年の彼が登場しているが、1830年代に活動を開始したマッツィーニは亡命先のマルセイユで1831年「青年イタリア」を、続いて「青年スイス」や「青年ヨーロッパ」を結成し、青年たち

<sup>53</sup> Maurizio Antonioli, Giampietro Berti, Santi Fedele e Pasquale Iuso, *Anarchici in un dizionario*, 《rivista anarchica》, a. 34, n. 1, febbraio 2004, pp.47-54.

<sup>54</sup> Donna R. Gabaccia, *Italy's Many Diasporas*, London, UCL Press, 2000. なお、戸田三三冬・山脇千賀子「グローバリゼーションとディアスポラ-なかま・つながり・＜ホーム＞をめぐる対話」『文教大学国際学部紀要』第11巻第2号（2001年2月）も参照。

の自由意志精神（ヴォロンタリズム）に訴え共和主義ヨーロッパの実現と、共和主義イタリアの統一と独立を唱道した。同じ頃ニース生まれの船乗り、ジュゼッペ・ガリバルディ（Giuseppe Garibaldi, 1807-1882）は、青年ヨーロッパ運動に共鳴し、南米各地（ブラジル、アルゼンティン、ウルグアイ）での独立運動に助力して、12年の義勇兵生活を送った。この間に、小共和国ウルグアイを助けて大国アルゼンティンに抵抗、イタリア人義勇兵部隊をゲリラ戦術で指揮して勝利し、彼は「英雄」としてヨーロッパにも知られるようになった。（この時の戦術を余すところなく使って、ガリバルディは「千人隊」を指揮し、南伊をブルボン王朝から奪って、イタリアの統一と独立に寄与したのである。）ガリバルディは、モンテヴィデオへの帰還に際し、ウルグアイ政府が国際義勇兵たちに与えようとした豊かな土地や家畜の報賞の申し出を、感謝の手紙とともに断った。

「すべての義勇兵は、圧政者が出現するところはどこでも、国や人民の区別なしに、自由のために戦うことがあらゆる自由な人間の義務と確信している。それは自由が人類の財産であるからである。」<sup>55</sup>

この信条は脈々と受け継がれる。半世紀のちの1912年、マラテスタたちは、イタリア政府のリビア侵略戦争を批判し、反戦とリビアの民の抵抗に味方するリーフレットを発行する。

「われわれはインタナショナリストである。[...] われわれは、祖国を全世界に広げるのだ。われわれは、すべての人間がみな兄弟姉妹だと感じ、すべての個人と人間集団に対して、快適な生活、自由、自治を望むのだ。」「われわれにとって、全ての圧迫された者、人類の解放のために闘うすべての人は兄弟である。そして、すべての圧迫者は、つまり、彼らがどこに生れ、どんな言葉を話していても、他人を苦しめて自分がよい思いをするものは、敵である。」

「このように考えると、歴史の面前で、人類の面前で、イタリアの名誉に救うべきものがあるとしたら、それを救うのは、またしてもわれわれ“非愛国者たち”であろう。

いまだイタリアにおいて、マツィーニとガリバルディ、そしてあの栄光あるイタリア人たちをふるいたせた感情が、消え去ってしまったのではないことを示すのは、われわれであろう。あの人たちは、どこであれ聖なる戦いが行なわれたヨーロッパとアメリカの戦場にかれらの骨をさらし、かくて、自由という、独立という、正義という大義に胸を高鳴らせるすべての国の人々に、イタリアの名を親しいものにしたのである。」<sup>56</sup>

リビア戦争の勃発は、イタリア民衆の間に「反軍国主義」の波を生んだ。そしてこの波動は、パリ・コミューン以来最大の民衆反乱といわれた、アドリア海の港湾都市アンコーナを中心とする、「セッティマーナ・ロッサ」（赤い一週間 *Settimana rossa*）、第一次世界大戦への参戦に反対する全国的大衆蜂起、へと連なってゆくのである。アンコーナに潜入したマラテスタは、「革命情勢」を感じ

<sup>55</sup> 藤沢房俊『赤シャツの英雄ガリバルディー伝説から神話への変容』（洋泉社、1987年）、41頁。藤沢氏はガリバルディを「民衆の英雄にした最も大きな要素」として、「富や名誉のために戦うのではないというこの禁欲的なまでの理想主義」を指摘しているが、まさにこの信条こそ、彼の一生を貫くものである。ガリバルディの伝記で定評ある力作：Alfonso Scirocco, *Garibaldi. Battaglie, amori, di un cittadino del mondo*, Milano, Laterza, 2001 においては、ガリバルディは「一人の世界市民」と命名されている。

<sup>56</sup> “La Guerra e gli anarchici”, dal numero unico 《La Guerra Tripolitana》, Londra, aprile 1912, in: Errico Malatesta, *Scritti antimilitaristi*, Carrara, Edizioni Segno Libero, 1982. tradotto a parte in: 戸田三三冬「リビアとイタリア」江口朴郎・板垣雄三編『交感するリビア 中東と日本を結ぶ』（藤原書店、1990）、177-182頁。

とる。一方、他国に例を見ない反戦への大衆の意思表示に直面したイタリア王国政府は、国家存立の危機を感じ、むしろ参戦に踏み切る。しかし、この反戦・反軍国主義の底流は、大戦後のファシズム勃興に際して、反ファシズム運動からレジスタンスへ<sup>57</sup>、という一大潮流として噴出するだろう。そのエートスは、「国民」である前に「人間」であること、自分の良心に聴き、自由意志で決断する「ヴォロンタリズム」(volontarismo) である。(maggio, 2004)

## 参考文献

本文中にあげたもののほか、若干の最も基礎的な文献をあげておこう。

### (1) マラテスタ自身の著作

Errico Malatesta, *Propaganda socialista. Fra contadini*, Firenze: La Questione Sociale, 1884. 邦訳：木下茂訳『農民に伍して』小作人社、1929年（復刻『農民の中へ』黒色戦線社、1971年）。また麻生義訳『農民の間にて』平凡社『社会思想全集28』、1930年。

Errico Malatesta, *Anarchy*, (Freedom Pamphlets), London, s.d. 邦訳：麻生義訳「無政府論」平凡社『社会思想全集28』。また訳者不祥『無政府主義論』黒色戦線社、1930年。

Errico Malatesta, *La politica parlamentare nel movimento socialista*, London: Biblioteca dell' Associazione, 1990. 邦訳：訳者不詳『選挙戦に際して』自由書房、1929年（復刻『選挙戦に際して付マラテスタ伝』黒色戦線社、1971年）。

Errico Malatesta *Il nostro programma*, Paterson, New Jersey, USA, 1903. 邦訳：木下茂訳『協働と連帯』自由連合社、1934年（ガリ版復刻、発行所カオス、1972年）。

Errico Malatesta, *Scritti scelti*, 3 voll., con prefazione di Luigi Fabbri, Ginevra : Risveglio, 1934-1936 (reprint, edito a cura del Movimento Anarchico Italiano, con presentazione di Gino Cerrito, Carrara 1975).

Errico Malatesta, *Scritti scelti*, a cura di Cesare Zaccaria e Giovanna Berneri, Napoli: RL, 1947.

Errico Malatesta. *His Life & Ideas*, compiled and Edited by Vernon Richards, London: Freedom Press, 1965. イタリア語訳：Errico Malatesta. *Vita e idee*, a cura di Vernon Richards, Catania: Collana Porro, 1968).

Errico Malatesta, *Scritti scelti*, a cura di Gino Cerrito, Roma: Samonà e Savelli, 1970.

Errico Malatesta, *Rivoluzione e lotta quotidiana*, a cura di Gino Cerrito, Milano, Antistato, 1982.

Errico Malatesta. *Epistorario, lettere edite e inedite 1873-1932*, a cura di Rosaria Bertolucci, Carrara: Centro Studi Sociali, 1984.

<sup>57</sup> 参照：フランコ・ヴェントゥーリ氏講演・戸田三三冬編訳「イタリア・レジスタンスの諸問題」『現代史研究』第28号（1976年）、《SPAZIO》, n. 37（1988）に再録。戸田三三冬「女性・エコロジー・第三世界—南北イタリアからの視点」石堂清倫・いいだもも・片桐薫編『生きているグラムシ』（社会評論社、1989年）。同「反ファシズム青年群像素描」フォーラム90's 編『グラムシの思想空間』（社会評論社、1992年）。同「第一次世界大戦とイタリアの戦後若者文化（1918-1920）」『歴史と地理』1995年8月号。同「クローチェと＜自由の鐘の鳴る処＞」『史冊』第35号（1994年11月）。同「解説」アーダ・ゴベッティ／戸田三三冬監修・解説／堤康徳訳『パルチザン日記1943-1945 イタリア反ファシズムを生きた女性』（平凡社、1995年）。同「仲間の繋がりと＜ソシャビリテ＞の運動——あるべき市民社会の模索：アーダ・ゴベッティ」『歴史学研究』N.755増刊号（2001年10月）。



(2) マラテスタの伝記

Max Nettlau, *Errico Malatesta. Das Leben eines Anarchisten*, Berlin 1922. イタリア語訳：ID., *Errico Malatesta. Vita e pensieri*, New York, 1922. スペイン語訳：ID., *Errico Malatesta, La vida de un anarquista*, Buenos Aires 1923.

Luis Fabbri, *La vida el pensamiento de Errico Malatesta*, Barcelona 1935.

Luigi Fabbri, *Malatesta: l'uomo e il pensiero*, Napoli 1951.

Armando Borghi, *Errico Malatesta*, Milano 1947.

Stefano Archangeli, *Errico Malatesta e il comunismo anarchico italiano*, Milano 1972.

Nicola Terracciano, *Errico Malatesta. S. Maria C. V. (Nel Cinquantenario della morte)*, Caserta: Istituto per la Storia del Risorgimento Italiano, Comitato di Caserta, 1982.

(3) ナポリにおける労働・社会運動

Nello Rosselli, *Mazzini e Bakunin. Dodici anni di movimento operaio in Italia (1860-1872)*, Torino: Fill. Bocca, 1927.

Max Nettlau, *Bakunin e l'Internazionale in Italia. Dal 1864 al 1872*, Ginevra: Risveglio, 1928.

【付記】

なお、「日本におけるマラテスタ」については、1982年9月、ミラノで開催された「マラテスタ死後50年祭」で報告したことがある。Misato Toda, “Malatesta in Giappone” (inedito).

